

原著

J リーグチームをフィールドとした体験学習プログラムの ジェネリックスキル評価

行實 鉄平 佐藤 充宏
徳島大学大学院総合科学研究部

要約：本研究では、J リーグチーム（徳島ヴォルティス）をフィールドとした体験学習プログラム（試合運営サポート活動）を開発・実践し、同プログラムを「ジェネリックスキル」の観点から評価することで、大学におけるスポーツを通じた体験学習プログラムの成果と課題を抽出することを目的とした。また、本研究では、この体験学習プロジェクトを通して醸成されるジェネリックスキルを「表現力」、「企画力」、「協働力」、「実践力」、「スポーツ社会機能の理解力」の 5 要素として措定し、この要素の信頼性・妥当性を検証するとともに、対象学生の各種特性との比較分析を施した。その結果、全体的に学生のジェネリックスキルは、体験学習プログラムを通して向上する傾向が見られた。また、性別、学年、ボランティア経験、学習グループによる差異を明らかにすることができた。

（キーワード：J リーグチーム 体験学習 ジェネリックスキル）

The Value of Generic Skills of an Experiential Learning Program in the Field of a J League Team

Teppei YUKIZANE and Mitsuhiro SATO
Faculty of Integrated Arts and Sciences, Tokushima University

Abstract: This study aimed to evaluate an experiential learning program in the field of a J League Team (Tokushima Vortis) from the perspective of generic skills. The study established five such elements of generic skills that improved through an experiential learning program: expressive power, planning capability, cooperative power, practice power, and the social/functional knowledge of the sport, and the reliability of these five generic skill elements was analyzed. Furthermore, this study offers an analysis of the dynamics between the elements of the generic skills and the characteristics of the students.

The results indicate that there was an improvement in the generic skills of the students through this experiential learning program. In addition, this study revealed that the improvement of the generic skill elements differed according to the gender, grade, volunteer experience, and learning group of the participants.

(Keywords: J League Team, experiential learning, generic skills)

1. はじめに

近年、大学教育における「グローバル化（大学の世界標準化）や「ユニバーサル化（大学の全入化）」の進展は、その質保証という観点から、「何を教えるのか」ではなく、「何ができるようになるのか」、すなわち、学生の学習成果（アウトカム）に焦点をあてた教育内容や方法の検討・改善を迫っている。これは、経済産業省¹⁾が打ち出す「社会人基礎力」や厚生労働省・中央職業能力開発協会²⁾の「就職基礎力」、文部科学省・中央教育審議会大学分科会³⁾が定義する「学士力」といった、いわゆる、汎用性のある技能としての「ジェネリックスキル（以下、GS とする）」を大学教育の中でいかに養成していくのかという取り組みにほかならない。

しかしながら、この GS の評価は、従来の授業における知識習得に関する評価ではなく、創造力やコミュニケーション力など、多角的な資質・能力要素をいかにアセスメントしていくのかといった課題が指摘されている⁴⁾。

翻って、体育・スポーツ科目は、身体活動を伴い、学生同士の協働を生み出す体験学習の機会を多く設定できることから、学生の主体性、能動性、協働性などを育みやすい科目であると考えられる。しかしながら、これまでの研究は、体育実技⁵⁾をはじめ、学生キャンプ実習^{6) 7)}や、インターンシップ実習⁸⁾といった授業と社会人基礎力との関係に関するものが散見されるものの、GS との関係に言及した研究は、皆無に等しい。また、これまでの研究で取り扱う実践は、学外の実習であ

っても基本的には履修者同士の協働作業で完結する活動プログラムであり、学外組織スタッフと協働し、現場の課題解決に向けたリアリティ感のある体験学習であるとは言い難い。さらに、上記の研究で用いられているインディケーターは、経済産業省¹⁾が示す社会人基礎力の要素(3次元12要素)を主な測定項目としており、体育・スポーツ科目で見出される独自の要素を探究しているものではない。

そこで、本研究では、Jリーグチーム(徳島ヴォルティス)をフィールドとした体験学習プログラム(試合運営サポート活動)を開発・実践し、学生にリアリティ感のある現場での課題解決活動を繰り返し体験させることで、同プログラムを通して醸成されるGS要素を評価・分析するとともに、大学におけるスポーツを通じた体験学習プログラムの成果と課題を検討していくことを目的とした。

2. 研究方法

(1) 授業(体験学習プログラム)の開発・実施

徳島大学総合科学部で開講している「基礎ゼミナール(1年次開講科目)」と「総合科学実践プロジェクト(3年次開講科目)」の履修者を対象にJリーグチーム(徳島ヴォルティス)をフィールドとした体験学習プログラムを開発・実施した。

本授業は、まず、第一に、オリエンテーションにおいて、授業デザインの説明を行うとともに、協働学習を促すための少人数グループ(1グループ3~4名の学年混合)を設定した。

第二に、試合運営サポート体験活動では、「座学+実践+ホーム試合観戦」をパッケージ化したものを「ホップ」、「ステップ」、「ジャンプ」の3回繰り返す現場学習を行った。具体的には、「ホップ(1回目)」では、徳島ヴォルティスの歴史と

接客をテーマにした座学を行うとともに、スタジアム内の業務を体験する活動(スタジアム出入口でチケットもぎり業務体験)を実施することとした。そして、「ステップ(2回目)」では、徳島ヴォルティスの事業をテーマにした座学を行い、スタジアム内外の業務を体験する活動(チケットもぎり、ボールパークにある各イベントコーナーで子どもと触れ合う業務体験)を実施することとした。さらに、「ジャンプ(3回目)」では、観戦者の満足度を促進させることをねらいとした試合前イベント企画を立案し、その企画を実際に実践する活動(本実践時は、フェイスペイント、うちわ工作、応援フラッグ作成、PK体験等)を実施することとした。なお、実施日時・場所・試合概要等は、表1に示す通りである。

第三に、先述した「ステップ(2回目)」と「ジャンプ(3回目)」の間には、グループワークの機会を数多く設定した。学生たちは、これまでの現場経験を踏まえ、観戦者の満足度を促進するアイデアを持ち寄り、その内容をグループで1つの企画としてまとめ、プレゼンテーションを行った。そして、各グループの企画を実際の現場で着地させるものにするため、最終的には徳島ヴォルティス社長に直接プレゼンテーションする機会を設定し、企画内容のさらなる精選を行った。ちなみに、本実践においては、8グループ中4グループの企画を着地することができた。

以上のように、本体験学習プログラムは、段階的に業務レベルを上げていく三部構成で現場実習を行った。また、学外組織である徳島ヴォルティスには、現場フィールドだけでなく、スタッフの方々にも数多くの協力をいただき、同プログラムを開発・実施することができた。なお、本授業の受講者は、1年生が15名、3年生が13名の合計28名であった。

表1 体験学習プログラムの概要

内容項目		1回目(ホップ)	2回目(ステップ)	3回目(ジャンプ)
座学	日時	2015年4月24日(金)10:30~12:00	2015年5月15日(金)10:30~12:00	2015年6月19日(金)10:30~12:00
	内容	チームおよび試合企画についての説明	接客態度・技術の紹介、目標設定、サポートスタッフ制度紹介	参加学生より代表取締役社長に企画についてプレゼンテーション
現場学習および試合概要	日時	2015年4月29日(水・祝)14:00	2015年5月24日(日)14:00	2015年7月12日(日)18:00
	対戦(結果)	徳島vs大宮戦(△0-0)	徳島vs札幌戦(●1-2)	徳島vs北九州戦(●0-1)
	天気	雲、弱風	晴、弱風	雨、強風
	観客数	4,316人	4,595人	3,979人
	活動内容	入場口、プレイパーク、総合案内、グッズ売場	入場口、プレイパーク、総合案内、グッズ売場、イベント対応	フェイスペイント、うちわ、応援フラッグ作成、入場体験企画

表2 授業計画(シラバス)概要

授業 目的	本授業では、Jリーグ(徳島ヴォルティス)チームの試合運営サポート活動を通して学生の「主体的に考える力」を養うことを目的としている。
授業 計画	1. オリエンテーション(授業デザインの説明および学習グループの設定)
	2. プロスポーツチームの歴史とホームタウン活動(地域貢献活動について)
	3. プロスポーツチームの運営サポート体験(ホップ1:スタジアム内活動)
	4. プロスポーツチームの運営サポート体験(ホップ2:スタジアム内活動)
	5. プロスポーツチームの接客対応について
	6. プロスポーツチームの運営サポート体験(ステップ1:パーク内活動)
	7. プロスポーツチームの運営サポート体験(ステップ2:パーク内活動)
	8. プロスポーツチームの運営活動企画1(アイデア創出グループワーク)
	9. プロスポーツチームの運営活動企画2(プレゼン作成グループワーク)
	10. 企画内容のプレゼンテーション
	11. 企画着地に向けたグループワーク
	12. 企画運営についてのグループワーク
	13. 企画運営準備作業
	14. プロスポーツチームの運営サポート体験(ジャンプ1:スタジアム+パーク内活動)
	15. プロスポーツチームの運営サポート体験(ジャンプ2:スタジアム+パーク内活動)
	16. 総括

(2) ジェネリックスキル要素の措置

GS は、「転移可能スキル (Transferable Skills)」とも呼ばれ、特定の文脈を超えて、様々な状況のもとで適用できる高次のスキル⁹⁾であり、どのような職業にも求められる基礎的な資質能力とされている。また、Barnett¹⁰⁾は、大学で育成すべきコンピテンスを「学術的(アカデミック)な力」と「社会的(労働の世界)な力」、「特定の分野に限定して必要な力」と「一般的に必要な力」の2軸により、4象限のコンピテンスを整理している。具体的には、①「学問分野固有のコンピテンス」、②「学問分野共通のコンピテンス」、③「職業固有のコンピテンス」、④「汎用的なコンピテンス」の4つを示しているのだが、そのなかでも、④「汎用的なコンピテンス」は、今後の大学教育において新たにその育成に取り組むべき方向性として位置付けている。

しかしながら、GS は、こうした暫定的な定義あるいは位置づけがなされているものの、明確な定義は不在であり、国や地域によって、また、同一国内においても多様な名称を持っている⁴⁾。これは、我が国においても、「社会人基礎力」、「就業基礎力」、「学士力」といった GS を指す名称が多様にある事からも容易に想像できよう。また、清水⁴⁾は、GS は、産業界からの要請によって主導されてきた側面がある一方で生涯学習やコミュニティ論に由来する要素も盛り込まれており、その起源は単純でなく、仮に GS が1つの能力要素であるとしても、どの段階で、いかなる観点で切り取るかによって、その断面図は大きく異なることを GS 要素の文献レビューによって確認して

いる。つまり、GS 要素は、これまでの多様な要素を踏まえつつも、大学組織のポリシーによって、また、個々の授業のねらいによって、その内容に合わせた定義づけをする必要性があるといえよう。そこで、本研究では、対象授業の「ねらい」や「到達目標」に基づいて GS 要素を措置することとした。

翻って、本授業は、Jリーグチームにおける試合運営サポート活動を通して GS を身に付けることを目的としており、その本旨は、「主体的に考える力の育成」を「ねらい」として設定している。ここでいう「考える力」とは、「お客様(観戦者)は何を求めているのか」、「どうやったら楽しい時間を過ごしてもらうことができるのか」といったような、答えのない問いへの挑戦を経て、学生達に育まれるであろう「課題解決力」を含意している。また、上記のめあてを基軸とした具体的な3つの到達目標、①「自分の意見を自分で表現できる」、②「自分たちで考えた企画をみんなで協力して実践できる」、③「スポーツの社会的機能(役割)について理解できる」といった下位目標を設定している。

そこで、本授業で設定した上記の到達目標を基調に、Australian National Training Authority¹¹⁾で示された「Defining Generic Skills: At a Glance」の6要素、経済産業省¹⁾で示された「社会人基礎力」の12能力要素、文部科学省・中央教育審議会大学分科会³⁾で示された「汎用的技能」の5要素を参考にしながら、最終的には、そこから導き出される「①表現力」、「②企画力」、「③協働力」、「④実践力」、「⑤スポーツ社会機能の理解力」といっ

た 5 要素を本授業において育まれる GS 要素として措定した。また、GS 要素を測定するインディケータは、各 2 項目ずつ設定し、合計 10 項目をもって GS の測定を試みた (表 3)。なお、各測定スケールには、リッカート型尺度の 5 段階評定

を用いた。さらに、その数値化にあたっては、5 段階評定順にそれぞれ 5, 4, 3, 2, 1 の得点を与え、これらの段階は間隔尺度を構成するものと仮定した上で各種分析を進めた。

表3 GSの各要素と測定項目

GS要素	項目
表現力	①自分が感じた事や考えたことを文章にできる
	②自分が感じた事や考えたことを発言できる
企画力	③これまでに学んだ知識や経験を基に新しいアイデアを提案することができる
	④自分が感じた課題を解決するプロセスを文章化することができる
協働力	⑤立場の異なる相手の背景や事情を理解することができる
	⑥相槌や共感等により、相手に話しやすい状況を作ることができる
実践力	⑦周囲から期待されている自分の役割を把握して、行動することができる
	⑧自分にできること、他人ができることを的確に判断して行動することができる
スポーツ社会機能の理解力	⑨スポーツの多様な価値を創造することができる
	⑩スポーツの社会的な効果を提示することができる

(3) データ収集

受講者を対象に質問紙調査を実施した。具体的には、「ステップ」から「ジャンプ」において業務レベルが大幅に高まることを考慮して、「ステップ」終了後（以下、「pre」とする）と「ジャンプ」終了後（以下、「post」とする）の 2 回の調査を行い、GS 要素の変化を比較検討した。調査日は、1 回目：2015 年 5 月 24 日、2 回目：2015 年 7 月 12 日で、場所は現場実習地であった、鳴門・大塚スポーツパーク（ポカリスエットスタジアム）内の控室で実施した。なお、本調査の有効回収標本数（回収率）は、28(100%)であった。

(4) 分析方法

測定項目の信頼性および妥当性を検証するために、各 GS 要素で主成分分析を行うとともに、クロンバック α 係数を算出した。そして、活動前・後における GS 要素の変化を検証するために、各要素 2 項目の合計得点を算出し、pre と post について GS 要素と学生の各種特性との平均値の比較を行った。その際、有意差検定には t 検定を用いた。なお、学生の各種特性は、表 4 に示すように、男性・女性といった「性別」、1 年生・3 年生といった「学年」、ボランティア経験の有・無といった「ボランティア経験」、プレゼンテーションでの企画内容が採用された選抜グループ・非選抜グループといった「学習グループ」の 4 つの観

点から把握し、各種分析を進めた。

3. 結果・考察

(1) 履修学生の特徴および全体的な GS 評価

表 4 は、履修学生の各種特性を示したものである。「性別」は「男子 14 名」(50.0%)、「女子 14 名」(50.0%)、「学年」は「1 年生 15 名」(53.6%)、「3 年生 13 名」(46.4%)、「ボランティア経験」は、「経験あり 14 名」(50.0%)、「経験なし 14 名」(50.0%)、「学習グループ」は「選抜されたグループ 15 名」(53.6%)、「選抜されなかったグループ 13 名」(46.4%)であった。これらの特徴によって分類される学生数は、大きな偏りがみられず、全体数をおおよそ 2 分するものであったことから、GS 評価との比較分析をさらに進めることとした。

表4 履修学生の各種特性

項目	度数	%
性別	男子	14
	女子	14
学年	1年生	15
	3年生	13
ボランティア経験	あり	14
	なし	14
学習グループ	選抜グループ	15
	非選抜グループ	13

表 5 は、GS 評価の全体的な結果を示したものである。まず、本研究において措定した 5 つの GS 要素の妥当性・信頼性であるが、主成分分析では、第一主成分のみが抽出され、固有値は 1.453

～1.733, 分散は 72.7%～86.6%, α 係数は, .621～.840 であったことから, ある程度の妥当性・信頼性を確保できると考え, GS の測定に用いた 10 項目を削除することなく各種分析を進めることとした。

次に, pre と post の変化については, すべての GS 要素において pre よりも post においてポイントが高い傾向を確認することができた。つまり, 全般的に履修学生は, 体験学習プログラムを通して, GS を高めていることが明らかとなった。

表 6 GS要素の妥当性・信頼性および全般的な評価

GS要素	項目	5	6	7	8	9	t値 df	p	固有値 分散%	α
表現力	①文章にできる			6.9	8.0		-3.246	**	1.625	0.768
	②発言できる						27		81.2	
企画力	③アイデアを提案できる	5.9			7.5		-5.183	***	1.453	0.621
	④課題解決プロセスを文書化できる						27		72.7	
協働力	⑤相手を理解できる			7.2			-4.299	***	1.51	0.86
	⑥相槌や共感できる				8.3		27		75.5	
実践力	⑦役割を把握し行動できる			7.1			-3.396	**	1.615	0.739
	⑧自分や他人ができることを判断できる				8.1		27		80.6	
スポーツ社会 機能の理解力	⑨スポーツ価値を創造できる		6.9				-4.296	***	1.733	0.84
	⑩スポーツ社会効果を提示できる				8.2		27		86.6	

n=28 項目内容は簡略化している **p<.01 ***p<.001

(2) 性別にみる GS 評価

表 6 は, 性別における GS 評価を示したものである。pre と post による平均値の比較分析(t 検定)を行った結果, 男子は, 「表現力」, 「企画力」, 「協働力」, 「実践力」の GS 要素が高まっていることが明らかとなった ($p<.05$)。また, 女子は, 「企画力」, 「協働力」, 「スポーツ社会機能の理解力」の GS 要素が高まっていることが明らかとなった ($p<.01$)。このことから, 性別によって GS 要素の高まりの相違を明らかにすることができたといえよう。また, pre と post の比較検定による変化が認められなかった要素での考察としては, 男子では「表現力」, 「実践力」が女子よりも高まる傾向であり, 一方, 女子では「スポーツ社会機能の理解力」が男子よりも高まる傾向であることがうかがえた。

(3) 学年別にみる GS 評価

表 7 は, 学年における GS 評価を示したものである。pre と post による平均値の比較分析(t 検定)を行った結果, 1 年生は, すべての GS 要素が高まっていることが明らかとなった ($p<.05$)。また, 3 年生は, 「協働力」, 「スポーツ社会機能の理解力」の GS 要素が高まっていることが明らかとなった ($p<.05$)。つまり, 学年によっても GS 要素の高まりの相違を明らかにすることができたといえよう。また, pre と post の比較検定による変化が認められなかった要素での考察としては, 1 年生

は「表現力」, 「企画力」, 「実践力」が 3 年生よりも高まる傾向であることがうかがえた。

(4) ボランティア経験にみる GS 評価

表 8 は, ボランティア経験(過去のボランティア経験の有無)における GS 評価を示したものである。pre と post による平均値の比較分析(t 検定)を行った結果, 過去にボランティア経験のある人は, 「企画力」, 「協働力」, 「スポーツ社会機能の理解力」の GS 要素が高まっていることが明らかとなった ($p<.05$)。また, 過去にボランティア経験のない人は, 「表現力」, 「企画力」, 「協働力」, 「実践力」の GS 要素が高まっていることが明らかとなった ($p<.05$)。このことから, ボランティア経験によって GS 要素の高まりの相違を明らかにすることができたといえよう。また, pre と post の比較検定による変化が認められなかった要素での考察としては, ボランティア経験のある人は, 「スポーツ社会機能の理解力」がボランティア経験のない人よりも高まる傾向であり, 一方, ボランティア経験のない人は, 「表現力」, 「実践力」がボランティア経験のある人よりも高まる傾向であることがうかがえた。

(5) 学習グループにみる GS 評価

表 9 は, 学習グループ(プレゼンテーションにおいて企画が採用された, つまり, 選抜グループと非選抜グループ)における GS 評価を示したものである。pre と post による平均値の比較分析(t

検定)を行った結果、選抜グループは、「企画力」,
「実践力」,「スポーツ社会機能の理解力」の GS
要素が高まっていることが明らかとなった
($p<.01$)。また、非選抜のグループは、「表現力」,
「企画力」,「協働力」,「スポーツ社会機能の理解
力」の GS 要素が高まっていることが明らかとな
った ($p<.05$)。つまり、プレゼンテーション企画
の選抜有無による学習グループにおいても GS 要

素の高まりの相違がみられるといえよう。また、
pre と post の比較検定による変化が認められな
かった要素での考察としては、選抜グループは、「実
践力」が非選抜グループよりも高まる傾向であり、
一方、非選抜グループは「表現力」,「協働力」が
選抜グループよりも高まる傾向であることがう
かがえた。

表6 GS評価(性別)

項目	男子(n=14)							女子(n=14)						
	pre		post		t検定			pre		post		t検定		
	M	SD	M	SD	t	df	p	M	SD	M	SD	t	df	p
表現力	6.79	1.31	8.14	1.17	-3.387	13	**	7.07	1.39	7.79	1.12	-1.439	13	n.s.
企画力	5.57	1.09	7.21	1.31	-3.452	13	**	6.14	1.03	7.71	0.91	-3.782	13	**
協働力	7.14	1.23	8.07	0.92	-2.879	13	*	7.21	1.48	8.57	1.40	-3.177	13	**
実践力	6.79	0.97	8.00	1.11	-3.631	13	**	7.50	1.16	8.21	0.89	-1.546	13	n.s.
スポーツ社会 機能の理解力	7.00	1.36	7.93	1.64	-2.120	13	n.s.	6.79	1.31	8.43	1.22	-4.101	13	***

*: $p<.05$ **: $p<.01$ ***:. 001 n.s.;no significance

表7 GS評価(学年別)

項目	1年生(n=15)							3年生(n=13)						
	pre		post		t検定			pre		post		t検定		
	M	SD	M	SD	t	df	p	M	SD	M	SD	t	df	p
表現力	6.93	1.34	8.07	1.03	-2.915	14	*	6.92	1.38	7.85	1.28	-1.720	12	n.s.
企画力	5.60	0.99	7.67	1.05	-5.998	14	***	6.15	1.14	7.23	1.24	-2.103	12	n.s.
協働力	7.13	1.25	8.13	1.19	-2.958	14	**	7.23	1.48	8.54	1.20	-3.045	12	**
実践力	6.93	1.10	8.13	1.06	-3.674	14	**	7.38	1.12	8.08	0.95	-1.426	12	n.s.
スポーツ社会 機能の理解力	6.60	1.18	7.87	1.55	-3.30	14	**	7.23	1.42	8.54	1.27	-2.694	12	*

*: $p<.05$ **: $p<.01$ ***:. 001 n.s.;no significance

表8 GS評価(ボランティア経験)

項目	過去のボランティア経験あり(n=14)						過去のボランティア経験なし(n=14)							
	pre		post		t検定			pre		post		t検定		
	M	SD	M	SD	t	df	p	M	SD	M	SD	t	df	p
表現力	7.36	1.22	7.93	1.27	-1.228	13	n.s.	6.50	1.35	8.00	1.04	-3.606	13	**
企画力	6.00	1.11	7.71	0.61	-5.326	13	***	5.71	1.07	7.21	1.48	-2.767	13	*
協働力	7.36	1.60	8.29	1.44	-2.879	13	*	7.00	1.04	8.36	0.93	-3.177	13	**
実践力	7.43	1.16	8.14	0.86	-1.587	13	n.s.	6.86	1.03	8.07	1.14	-3.465	13	**
スポーツ社会 機能の理解力	6.71	1.54	8.50	1.29	-3.995	13	**	7.07	1.07	7.86	1.56	-2.148	13	n.s.

*: $p<.05$ **: $p<.01$ ***:. 001 n.s.;no significance

表9 GS評価(学習グループ)

項目	選抜グループ(n=15)						非選抜グループ(n=13)							
	pre		post		t検定			pre		post		t検定		
	M	SD	M	SD	t	df	p	M	SD	M	SD	t	df	p
表現力	7.27	1.03	8.00	1.31	-1.622	14	n.s.	6.54	1.56	7.92	0.95	-3.102	12	**
企画力	5.93	1.10	7.60	1.24	-3.757	14	**	5.77	1.09	7.31	1.03	-3.438	12	**
協働力	7.40	1.12	8.13	1.25	-1.911	14	n.s.	6.92	1.55	8.54	1.13	-4.882	12	***
実践力	7.20	1.01	8.40	0.74	-3.85	14	**	7.08	1.26	7.77	1.17	-1.389	12	n.s.
スポーツ社会 機能の理解力	6.80	1.32	8.27	1.58	-3.773	14	**	7.00	1.35	8.08	1.32	-2.276	12	*

*: $p<.05$ **: $p<.01$ ***:. 001 n.s.;no significance

4. まとめ

本研究では、Jリーグチームをフィールドとした体験学習プログラムを開発・実践し、同プログラムをGSの観点から評価することで、大学におけるスポーツを通した体験学習プログラムの成果と課題を抽出することを目的とした。その結果、以下の成果を明らかにすることができた。

まず、第一に、本授業を通して育成されるGS要素を5つ措定し、各種分析を施した結果、ある程度の妥当性・信頼性を確認することができた。つまり、本授業を通して育まれる独自のGS要素を明らかにすることができた。

第二に、活動前・後におけるGS要素の変化を検証した結果、体験学習プログラムを通してGSは、全般的に高まっている傾向が明らかとなった。

第三に、学生の諸特性とGS要素の変化との比較分析を行った結果、性別、学年、ボランティア

経験、学習グループによる差異を明らかにすることができた。具体的には、性別では「男子」、学年では「1年生」、ボランティア経験では「過去にボランティア経験がない人」、学習グループでは「非選抜グループ」において多くのGS要素に変化を認めることができた。また、各GS要素からみた学生の特徴との関係性としては、①「表現力」では「男子」、「1年生」、「ボランティア経験ない人」、「非選抜グループ」において高まっており、②「企画力」では、「1年生」において、③「協働能力」では、「非選抜グループ」において、④「実践力」では、「男子」、「1年生」、「ボランティア経験ない人」、「選抜グループ」において、⑤「スポーツ社会機能の理解力」では、「女子」、「ボランティア経験ありの人」において高まっていることが明らかとなった。(表10)

表10 各GS要素からみた学生の特徴との関係性

項目	諸特性
表現力	「男子」、「1年生」、「ボランティア経験なし」、「非選抜グループ」
企画力	「1年生」
協働能力	「非選抜グループ」
実践力	「男子」、「1年生」、「ボランティア経験なし」、「選抜グループ」
スポーツ社会機能の理解力	「女子」、「ボランティア経験あり」

一方で、以下に示す今後の課題も明らかとなった。

まず、第一に、学生の諸特性に対応した授業展開の検討が挙げられる。本研究の分析において学生の諸特性（カテゴリー）によるGS要素の相違が見られたが、GSの変化（GSの高まり）は、授業プログラムによって高められたのか、そもそも、GSが低い学生カテゴリーであるから高まりやすかったのか、本研究においては、その因果関係を明らかにする分析はできなかった。つまり、GSの変化がなかったカテゴリー学生は、すでにGSが高い学生であることも想定できるということである。よって、本研究における学生の諸特性は、このような2面性がある事を理解した上で授業対応していくことが今後は必要になるであろう。

第二に、調査方法の検討が挙げられる。本研究では、対象学生の負担を勘案し、「ステップ」終了後と「ジャンプ」終了後の2回の質問紙調査に留めたが、精緻な変化を捉えるためには、「ホップ」の終了後や、インタビュー調査（質的調査）との併用による把握といった調査の回数やタイミングの検討が必要といえよう。さらには、本研究で実施した受講生を対象に質問紙調査による「自己評価」だけではなく、グループ内で評価し合う「他者評価」や教員による「指導者評価」など、どのような視点で誰がGSの測定評価を行うかといった種類等の検討も必要になると考える。

第三に、GS要素の検討が挙げられる。本研究では、学生の負担を勘案し、本授業におけるGS要素の測定を5次元10項目で実施したが、他の

新たな要素を探索していくためには、さらに多くのインディケーターを設定し、因子分析等を施す測定などを蓄積していくことが必要と考える。

今後は、以上のような成果を活かし、課題を検討しながら大学におけるスポーツを通じた体験学習プログラムのエビデンス構築をさらに進めていくことが求められよう。

参考文献

- 1) 経済産業省：社会人基礎力に関する研究会－「中間とりまとめ」－，2006.
- 2) 厚生労働省・中央職業能力開発協会：若年者就職基礎能力修得のための目安策定委員会報告書，2004.
- 3) 文部科学省・中央教育審議会大学分科会：「学士課程教育の構築に向けて」，2008.
- 4) 清水禎文：ジェネリック・スキル論の展開とその政策的背景，東北大学大学院教育学研究科研究年報，61(1)，275-287，2012.
- 5) 石道峰典，西脇雅人，中村知浩：選択科目の体育実技授業を履修する大学生の社会人基礎力の特徴について，大学体育研究，37，1-10，2015.
- 6) 築山泰典，神野賢治，田中忠道：大学キャンプ実習が「社会人基礎力」に及ぼす有効性の検討，福岡大学スポーツ科学研究 39(1)，13-26，2008.
- 7) 青木康太郎，粥川道子，杉岡品子：キャンプ体験が大学生の社会人基礎力の育成に及ぼす効果に関する研究，北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要 3，27-39，2012.
- 8) 深津達也：スポーツ学部系大学生におけるインターンシップ実習の成果と課題：事前研修における『社会人基礎力』の変化，びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要，9，73-82，2012.
- 9) 川島太津夫：アウトカム重視の高等教育改革の国際的動向－「学士力」提案の意義と背景，日本比較教育学会「比較教育学研究」，38，2009.
- 10) Barnett,R: The Limits of Competence, Place Open University Press, 1994.
- 11) Australian National Training Authority : Defining Generic Skills : At a Glance, Place NCVER, 2003.